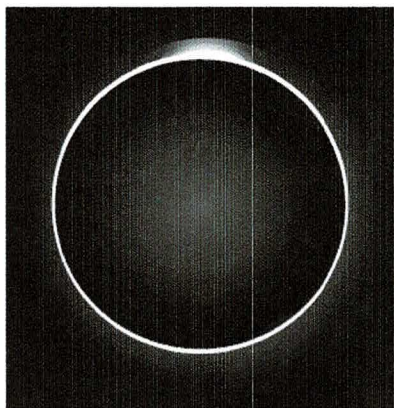


夜のノエル

小海 基



<カット・杉本功雄>

マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

(ルカ2:6b~8)

「ノエル」というフランス語は、そもそも「クリスマスの歌」ではなく、「ニュース」という意味の言葉です。聖書の中で私たちがは神様の大事な救いの出来事が昼の光の中ではなく夜の闇の只中で起きたことに出会います。世界の創造の初めも「光あれ」と、闇の只中から起こりました(創世記1:3)。

「奴隷の家」から解放される出エジプトも、真夜中の闇の中で「過ぎ越し」の出来事が起こり始まったのです(出エジプト記12:9)。そして私たちが待ちに待った救い主が生まれたという「ニュース(ノエル)」も、まさに夜の闇の只中で起こり、伝えられるのです。皆さんのくらの世代になると、徹夜の苦しさを知っていきましょう。

あの晩、宿屋に留まる場所もなく、初めての出産にもかかわらず緊急避難のように家畜小屋の飼葉桶に救い主の赤ちゃんは寝かされたのです(皆さんも燃料も尽き果て、戦場と化したガザの病院の廃墟の中にごろごろと並べられた新生児たちの姿をニュースで見ている心痛めたことでしょうか)。誕生に最初に立ち会ったのは、眠ることも出来ず夜通し羊の群れの番をしなければならなかった羊飼いたちでした。

希望に満ちた光の中でなく、何故絶望と死の影に満ちた闇の只中で救いの出来事が起こると聖書は記録するのでしょうか?それは私たちの救いが、私たち人間の罪も

死も絶望も滅ぼすほどの出来事であるからです。ご存じのようにクリスマスが12月25日に起こったとは聖書のどこにも書かれていません。しかし真夜中、暗闇の只中に起こったことははっきりと記録されています。

更に言えば、夜の食事、「最後の晩餐」の後、この救い主は捕えられ、十字架に付けられ、三日後の暗闇の只中で復活、イースターの出来事が起こるのです。

こうした救いの知らせは天使たちの「歌声」で伝えられました。徹夜で働く羊飼いか気づかない「歌声」だったというのですから、「きよしこの夜」の原詞の歌い出しのように「静かな夜」を揺るがすような大声量の合唱でなかったことでしょうか。眠ることも出来ず、暗闇に震え、絶望に取り囲まれているかに見える中で、突然、思いもかけないような形で、静かな天からの希望の光が差し込んでくるのが、最初のクリスマスの「ニュース(ノエル)」だったのです。

(12月20日明治学院東村山高校クリスマス賛美礼拝説教より)